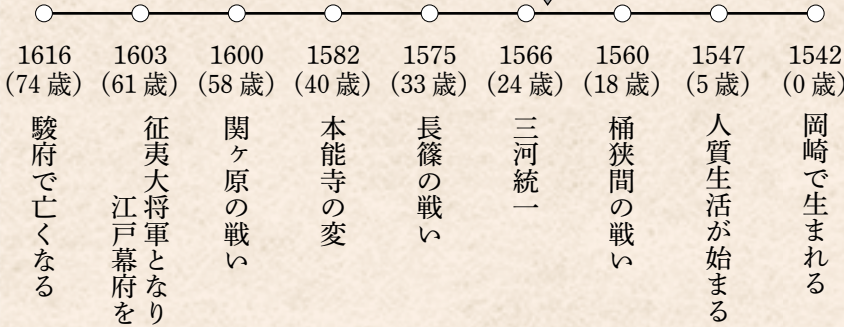


家康もめぐる

第3回 家康の吉田城攻め

今回はこのあたり



豊橋市内の徳川家康ゆかりの地を、2か月に1回の連載で学芸員が紹介します。



問合せ 文化財センター (☎56・6060)

吉田城のはじまりは、約520年前までさかのぼります。当時は今橋城と呼ばれており、今橋の地は室町時代前期の頃から豊川を活用して、人の往来や交易の拠点となっていたようです。



江戸時代後期の地誌「三河国吉田名蹤綜録」には、吉田城攻めの経緯が文章と挿絵で紹介されています。挿絵の吉田城は石垣と屋根瓦をもつ江戸時代の姿ですが、当時は土づくりで堀や土塁が中心の城でした。

今橋城は明応5（1496）年頃に地元領主の牧野古白によって築かれたと考えられています。その後は約70年

にわたって大名や地元領主による争奪戦が繰り返され、城主は戸田氏や今川氏に変わり、呼び名も今橋城から吉田城へと変更されました。

さて、桶狭間の戦いのあと、今川氏から独立した松平元康（後の徳川家康）は、織田信長と同盟を結び、駿河・遠江（現在の静岡県）の今川氏に従う東三河の地元領主たちを攻略していきました。元康から改名した家康は三河一向一揆を治め、永禄7（1564）年からは東三河の重要拠点で、今川氏の支配下にあった吉田城・牛久保城・田原城の攻略を進めました。当時、二連木（仁連木町）にいた戸田氏や牛久保豊川市（の牧野氏など地元領主たちは、今川氏の強力な後ろ盾を得る見返りに人質を預けていました。しかし、寝返つて松平氏に味方したため、人質たちは龍拈寺口（新吉町）で殺害されてしまい、遺体を埋葬した場所が十三本塚（富本町）だといわれています。一方で、戸田氏は人質に送っていた母を救出してから松平氏に寝返りました。

酒井忠次を中心とした松平氏の吉田城攻めは、今川氏から城の守備を任されていた大原（小原）肥前守の出陣を皮切りに、豊川対岸の地下合戦から始まりました。この戦いで、蜂屋貞次（半之丞）は本多忠勝と一番槍を争い、命

がけで今川勢に攻め入って鉄炮で狙い撃ちにあつた武勇伝を残しています。



一向一揆では家康と敵対した蜂屋貞次ですが、騒動後は許され再び家康に仕えました。吉田城攻めでは、敵陣に深入りして河井正徳に狙撃され、その傷がもとで死亡しました。その功からか徳川16将に数えられます。

その後、家康は喜見寺砦（花園町）・糟塚砦（小坂井）・二連木城などをおさえ、吉田城を包囲してから総攻撃を仕掛けましたが、攻めきれず長期戦となりました。

聖眼寺（下地町）に本陣を置いた家康は、大原肥前守と和談を進めました。和談の結果、家康は永禄8年に吉田城を手に入れましたが、交換条件として家康の異父弟と酒井忠次の娘を人質として今川氏に差し出しました。その後、今川氏から田原城の守備を任されていた朝比奈肥後守も家康に城を明け渡し、翌年に牛久保の牧野氏も降伏したので、ようやく東三河の多くが家康の支配下となりました。